霊宝館だより

題字・畠野光義師

霊宝館だより　第106号
平成25年4月21日発行
和歌山県伊都郡高野町高野山306
(財)高野山文化財保存会
高野山霊宝館
電話0736―56―2029
URL http://www.reihokan.or.jp

高野山壇上伽藍に建つ三昧堂と、新たに建立された歌碑（手前）関連記事は6～8頁

利用案内

開館時間
■11月1日～4月30日　8時30分～17時00分
■5月1日～10月31日　8時30分～17時30分

■休館日　年末年始のみ

■拝観料　大人　600円
高・大学生　350円
小・中学生　250円
高野町に住民票がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。

■専用駐車場あり

春期企画展
「悠久の美―高野山の金工品」
4月27日（土）～7月7日（日）

5月 5日(日)　こどもの日　小・中学生無料
5月15日(水)　開館記念日　無料開館
（国際博物館の日協賛）

毎月21日（弘法大師の日）ご来館の方にプレゼントあり！　ホームページ割引券もご利用ください

第106号　目次

春期企画展のご案内……2～3
収蔵品の紹介80……4
高野山の古建築 第十回……5
与謝野鉄幹・晶子歌碑建立に寄せて……6～8
霊宝館からのご案内……9
よもやま話 vol.27……10～11
霊宝館の庭園……12

春期企画展

「悠久の美—高野山の金工品」

期間　平成25年4月27日（土）～7月7日（日）

金銅八角輪宝　金剛三昧院

金銅蓮台形舎利容器
金剛峯寺

重要文化財　金銅五鈷鈴・金銅三鈷杵・金銅独鈷杵　金剛峯寺

金銅一面器　持明院

密教の修法には各種の法具、仏具が不可欠です。それらの多くは金工品であり、長い歴史の中で、寺宝として、また師資相承の証として大切に守られてきました。こうして伝えられた高野山の金工品は、国内屈指の量と質を誇ります。さらに、高野山は磬（音の出る仏具の一種）の宝庫でもあり、各時代の名品がそろっています。このほか壇上伽藍御社の懸仏（初公開）、刀剣などとともに、いつの世にも変わらぬ美しさで観る者を魅了する金工品の数々を一堂に展観します。

また同時開催として、重要文化財・曽我直庵の屏風二種類を七年ぶりに特別公開します。

主な出陳品

前期：4月27日（土）～6月2日（日）
後期：6月4日（火）～7月7日（日）

工芸

重文	金銅独鈷杵・金銅三鈷杵・金銅五鈷杵	金剛峯寺
	銅五鈷杵	正智院
	金銅五鈷杵	無量光院
	金銅五鈷杵	竜光院
重文	金銅四天王独鈷鈴・金銅五鈷鈴	金剛峯寺
重文	銅五鈷鈴	正智院
重文	銅梵釈四天王五鈷鈴	竜光院
県指定	金銅五鈷鈴	巴陵院
	金銅五鈷鈴	無量光院
	銅九鈷鈴	金剛峯寺
重文	金銅蝶形磬※	親王院
重文	金銅宝相華文線刻蓮華形磬	赤松院（前期）
重文	銅花鳥文磬	清浄心院
重文	銅孔雀文磬	蓮花院

同時開催

特別公開　重要文化財 曽我直庵筆屏風 二種

「鶏図」 六曲一双のうち右隻のみ展示　桃山時代　宝亀院
鶏や鷹を得意とした直庵の代表作。

「商山四皓及虎渓三笑図」 六曲一双　桃山時代　遍照光院
中国の故事を描いたもの。直庵には珍しい人物画。
（写真は「虎渓三笑図」）

剣　銘 信国
無量光院

金銅五鈷杵
竜光院

銅円形素文磬　普賢院

県指定	銅孔雀文磬※	普賢院
県指定	白銅素文磬	蓮華定院
	銅円形素文磬	普賢院
	銅素文磬	報恩院
	銅蓮華文磬	桜池院
重　文	金銅金剛盤	巴陵院（前期）
県指定	金銅金剛盤	親王院
	木製朱漆塗金剛盤	無量光院
	金銅八角輪宝	金剛三昧院
	金銅一面器	持明院
	金銅六器（片供器）	持明院
	金銅蓮台形舎利容器	金剛峯寺
重　文	銅蓮華形柄香炉	竜光院
重　文	金銅仏餉鉢	金剛峯寺（前期）
重　文	厨子入倶利伽羅竜剣	竜光院（後期）
重　文	厨子入金銅水神像	金剛峯寺（後期）
重　文	刀　銘 繁慶　附 繁慶寄進状	金剛三昧院
重　文	薙刀　銘 来国俊	無量光院
重　美	刀　銘 於南紀重国造之	無量光院
	太刀　銘 包永	無量光院
	剣　銘 信国	無量光院

※4頁で詳しくご紹介しています。

展覧会みどころ講座（場所：当館敷地内 迎賓館）

春期企画展のみどころについて、スライドをまじえ、わかりやすく解説します。

5月19日（日）、6月2日（日）、6月16日（日）
午後1時30分～2時　聴講無料、事前申込不要

収蔵品の紹介 80

重要文化財

金銅蝶形磬（こんどうちょうがたけい）

親王院蔵　鎌倉時代

幅 18.9 cm　高 11.4 cm

磬（けい）は仏具の一種で、磬架（けいか）（磬台）と呼ばれる専用の台に紐でつり下げられ、法会の際に打ち鳴らされます。お寺の本堂や、伽藍（がらん）大塔内部でも見ることができます。下の写真のような山形の金属板が一般的ですが、中には蓮華形や、本品のような蝶形の磬もあります。

蝶形の磬は現存例がごくわずかで、その中で本品は鎌倉時代を代表する、精巧なつくりの優品です。羽の模様は根元から先に向かってさまざまにあらわされ、前翅（ぜんし）と後翅（こうし）の境など三ヵ所にハート型の猪目透（いのめすかし）が施され、愛らしい雰囲気が感じられます。また触角は先が丸くなり、紐が通せるようになっていて、デザインと実用性がうまく融合されています。

中央には蓮華文の撞座（しゅもく）（打ち鳴らす部分）があらわされており、細かい線が刻まれ、蝶の形と相まって、なんだか叩（たた）くのがもったいないような気がしてしまいます。

本品は長らく大阪市立美術館へ寄託（きたく）（預けること）されていましたが、このたび高野山へ返却されることとなり、以後霊宝館において収蔵管理されます。実に四半世紀ぶりに舞い戻った蝶を、ぜひ今回の春期企画展でご覧下さい。

（F）

金銅蝶形磬

銅孔雀文磬（和歌山県指定、普賢院蔵）
一般的な形の磬です。企画展にて展示中。

連載

高野山の古建築

第十回　重要文化財 金剛峯寺山王院本殿

鳴海 祥博

本殿正面　間近で拝すると、立ちが高く重厚である。社殿の前に石像の白黒2匹の犬が置かれる。

山王院本殿の全景　右2棟が本殿、左端が総社。

向拝の組物　木鼻の形状に奈良の工匠の特色が表われている。

本殿の背面妻飾り　目立たない部分だが、意匠を凝らした木組みに力強さを感じさせる。

金剛峯寺山王院本殿は、壇上伽藍の西端の小高い場所に鳥居と瑞垣に囲まれひっそりと建っています。「御社」と呼ばれているように、それは神社です。そこには真言密教の教義と仏さまそして伽藍を守る「神」が祀られています。不思議な気もしますが、明治の神仏分離令で姿を消した「神仏混淆」の世界がここでは今も生きているのです。

ここに鎮座する「神」は「丹生明神」と「高野明神」の二柱で、高野山麓の天野にある丹生都比売神社の神さまです。特に高野明神は別名を「狩場明神」とも称し、白黒二匹の猟犬を従え、弘法大師を高野の地に導いたと伝えられています。また高野の地は元々は丹生一族の支配する所であったため、弘法大師は高野開創に当って、特に土地の神として丹生明神を勧請したとされています。

鳥居の奥に大きな本殿が二棟建ち、右に丹生明神、左に高野明神が祀られ、それはまた胎蔵界と金剛界の大日如来を象徴するとされています。

左手には「総社」という小さな流造りの社殿があって、そこには百二十番神という四方を日々交替で守護する神々が祀られています。

現在の社殿は、室町時代の大永二年(一五二二)に建てられたことが、社殿に記された墨書から明らかになっています。その前年に高野山は伽藍をはじめ山内のほとんどを焼き尽くす大火災に見舞われています。その復興に各地から多くの人達が駆けつけたのでしょう、墨書からこの社殿は奈良の大工によって再興されたことが確認されています。

本殿は春日造りという形式で、その名の通り、奈良春日大社が祖型とされていますが、奈良の工匠が再建を担当したのは、様式や技術を継承する正統性が認められたからかも知れません。しかしその規模は春日大社を遙かに凌ぐもので、正面の柱間三・三m、奥行五・六m、棟の高さ八mという規模は「一間社春日造り」という形式では最大規模を誇っています。

社殿は柱の頂部に取り付けられた「木鼻」という装飾的な部材の輪郭や、そこに施された浮き彫りの彫刻、「蟇股」という部材の輪郭、背面の「太瓶束」という部材の形状などに、奈良県下の建物と共通する顕著な特徴が見られ、奈良大工の作であることがうなずけます。

大永二年の再建から六十年後の天正十一年(一五八三)に木食応其上人がこの社殿を修復しています。現在見られる鮮やかな色彩や重厚な檜皮葺きの屋根は、どうやら木食応其の意向で装いを新たにされたもので、それまでは素木造りで板葺きだったようです。

再建から五百有余年、御社は多くの人達によって守り伝えられ、そこには時々の歴史の痕跡が刻み込まれているのです。積み重ねられた歴史に新たな一ページを付け加え、次の世代に送ることが、私たちの使命だと思うのです。

与謝野鉄幹・晶子歌碑建立に寄せて

高野山高等学校教諭　山本　七重

板じきの
冷たきに為て
朝きくハ
金剛峯寺の
山内の蝉

与謝野鉄幹

いにしへの
三昧堂を
くぐりきぬ
法の御山の
星の明りに

与謝野晶子

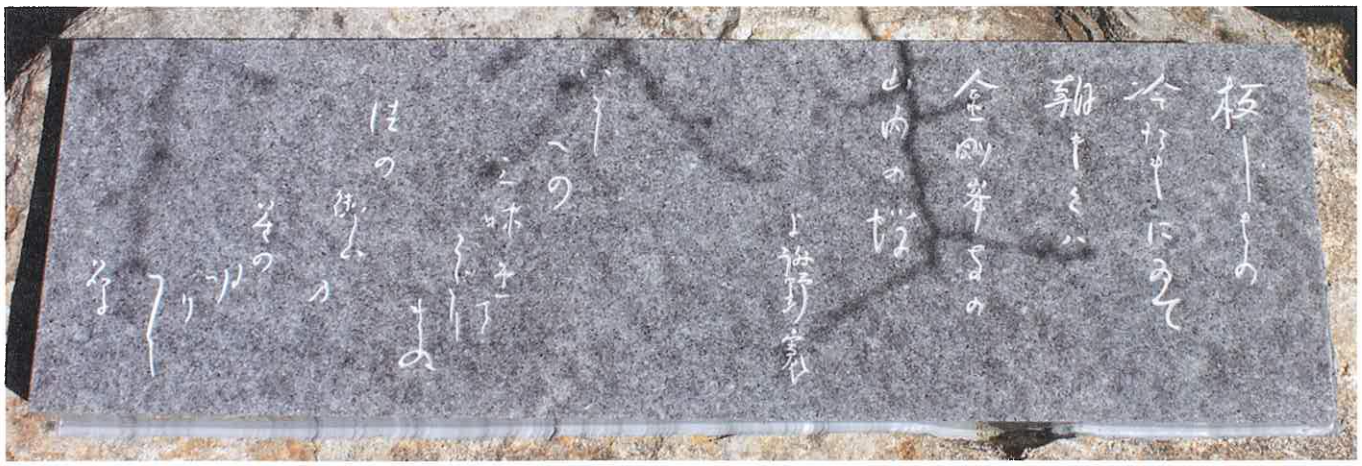
平成二十四年十二月十七日、壇上伽藍の三昧堂の前に右の歌が「与謝野鉄幹・晶子歌碑」として建立され除幕式が行われましたので、簡単にご紹介させていただきます。今回の歌碑建立は、平成二十七年に迎える高野山開創千二百年記念大法会の記念事業の一つとして行われたものですが、別掲の文章（次頁下段に掲載）の如く自筆の墨書が奉納された縁に寄るものです。

歌碑は高さが約八十cmの自然石の上に、横七十五cm、縦二十四cm、幅九cmの御影石がはめこまれており、そこに色紙からとった流麗な自筆による文字が刻まれています（次頁写真）。

なお、高野山で与謝野晶子の歌碑が建立されたのは二つ目で、最初の歌碑は昭和二十五年、奥之院に与謝野晶子顕彰会が堺市と南海電車の協力によって建立されています。その歌碑の歌は、「やわはだのあつき血潮にふれも見でさびしからずや道を説く君」というもので、歌集『みだれ髪』の中から採られています。

さて今回、伽藍に建立された歌碑の歌は、昭和六年八月五日から七日までの三日間にわたり開催された第十一回高野山夏季大学に夫妻で講師として出講した折に詠まれたもので、この時、鉄幹は五十九歳、晶子

歌碑背面のプレート
（文面は次頁囲み文章参照）



歌碑に刻まれた与謝野鉄幹・晶子自筆の文字

は五十三歳でした。

それぞれの歌を意訳すれば、鉄幹の歌は、八月というのに高野山の寺院の板敷きは冷たいことだ。それがまた清々しい。その冷たい板敷きに居て、朝から高野山で命いっぱい鳴いている蝉の声を聞くと生命の尊さをしみじみと感じることだ。

晶子の歌は、偉大な弘法大師空海が開いた仏法の聖地である高野山の夜空には美しい星が輝いている。その美しい星に誘われて、古の歌の聖である西行法師が修行されたと伝えられている三昧堂の横を通り抜け伽藍まで来たことであるよ、といった意味になるでしょうか。

●

さて、鉄幹の初期の歌は、例えば「韓にして、いかでか死なむ、われ死なば、をのこの歌ぞ、また廃れなむ。」や「われ男の子意気の子名の子つるぎの子詩の子恋の子あゝもだえの子」などといった情熱的で男性的な歌が有名ですが、右の高野山で詠まれた歌は非常に静かな歌であり、聖地高野山で詠まれた歌としてはふさわしい心境の歌だと思われます。なお、金剛峯寺という固有名詞を用いていますが、昔は一山全体を金剛峯寺と称したので、ここも本山だけを指すのではなく高野山全体と解釈するほうがよいでしょう。

高野山滞在中の夫妻は、三昧堂に近い親王院に宿泊したことが分かっていますが、晶子は山門を出てすぐ目の前の伽藍を星に誘われて散策しながら、自分と同じ歌の道に生涯を捧げた西行法師に思いをはせている姿がしのばれます。なお、「星の明かり」という言葉が短歌の中で使われていますが、晶子は第一歌集である『みだれ髪』に「夜の帳にささめき尽きし星の今を下界の人の鬢(びん)のほつれよ」といった有名で難解な歌をはじめ、星の歌をたくさん詠んでいますが、この「星」は晶子独自のロマネスクを理解する言葉として重要と思われ、高野山という悠久の空間の中で、古人や歌、歴史に対する思いを深めていることがうかがえます。

なお、歌人の永田和宏氏は『近代秀歌』（岩波新書）という本の中で、旅などで名所・旧蹟を訪ねる意義について、〈歴史的な建物、旧蹟を訪ねることは、空間的にその「場所」に到ることでもあるが、もう一方で、「時間」を遡って、歴史を追体験することでもある。時間と空間を二つ

愛媛県王至森寺住職瀬川大秀僧正が平成二十二年五月二十一日、真言宗御室派宗務総長　総本山仁和寺執行長に就任されました。

徳島県　立江寺住職庄野光昭僧正が同時期に同職に就任していたことを奇縁として、与謝野鉄幹晶子の墨書を当山に寄贈下さいました。

高野山開創千二百年記念大法会の記念とし、歌碑を建立致します。

平成二十四年十一月吉日

高野山開創千二百年記念大法会　事務局
総裁　高野山真言宗管長　松長有慶
総監　高野山真言宗宗務総長　庄野光昭
高野山開創千二百年記念大法会　実行委員会
委員長　太融寺住職　麻生弘道
副委員長　東光寺住職　松田俊教

—（前列向って右四人目より与謝野寛氏・同晶子女史・天沼俊一氏・松永有見氏）—

「前列向って右四人目より与謝野寛氏・同晶子女史・天沼俊一氏・松永有見氏」『高野山時報』第599号（昭和6年9月15日発行）より許可を得て転載

ながらに移動することによって、その場を訪れることに意味がある。〉と述べられていますが、歌碑となった与謝野夫妻の歌からは、金剛峯寺や三昧堂といった旧蹟を訪れることによって、時間を遡って様々な歴史的追体験をしていることが感じられます。

さて前述したように、与謝野夫妻は第十一回高野山夏季大学に出講するために高野山を訪れたわけですが、以下余談としてこの回の夏季大学ではどのような講演が行われたかや、社会事情がどうだったのかを挙げてみます。鉄幹（本名・寛、慶応大学教授）が「古歌及び現代短歌」、晶子が「女子の活動領域—特に婦人と短歌—」で、その他の講師と演題は天沼俊一（京都大学教授）「高野山の国宝建築について」、下田将美（大阪毎日新聞社経済部長）「金の考察」、松長有見（高野山大学教授）「密教浄土の建設」となっている他、この年の主な内外事情は「スペイン革命、満州事変始まる、瑞金政府樹立、金輸出再禁止、農村不況深刻化」といったことがあったようです

また、大正十年に第一回目が開催されてから、本年の夏で第八十九回を数える「高野山夏季大学」（総本山金剛峯寺と毎日新聞社主催）は、毎年多彩な講師を招聘しており、これまでの講師陣を拝見しますと錚々たる人物が名前をならべていて驚きにたえません。ちなみに、昨年の「第88回　高野山夏季大学」小冊子の記録年表から任意に講師名を拾ってみますと、倉田百三、新渡戸稲造、和辻哲郎、菊池寛、直木三十五、大佛次郎、吉川英治、折口信夫、田畑忍、安倍能成、里見弴、大山康晴、小林秀雄、木村義雄、吉屋信子、檀一雄、村上元三、保田与重郎、神近市子、平林たい子、大宅壮一、松本清張、瀬戸内晴美、司馬遼太郎、ミヤコ蝶々、西川きよし、中坊公平、村山富市、土井たか子、中村吉右衛門、池上彰などなど多彩な顔ぶれです。

年表というものは、眺めていると時代背景をはじめとして、様々な点と線がつながっていくことがしばしばあり面白いものです。

何はともあれ、多くの方々のお力により聖地高野山に文学碑ができたことはありがたいことです。皆様も高野山にお越しになられた折には、ぜひ歌碑を訪ねて高野山の文化に触れてみられてはいかがでしょう。

高野山霊宝館からのご案内

■長谷川智弘作品展 結びの世界「みやび」

［会期］4月29日（月・祝）～5月5日（日）
会期中無休
［場所］当館敷地内 迎賓館
［時間］午前10時～午後5時
入場無料。さまざまな紐結びの美をお楽しみください。

昨年の展示品

■シャクナゲの開花

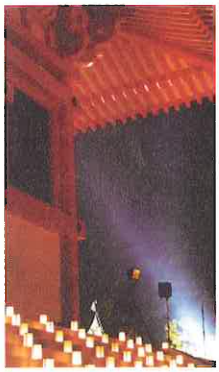
当館の前庭と、中庭のシャクナゲが見頃を迎えます（例年5月上旬）。シャクナゲは高野町の「町花」になっています。

昨年の開花の様子

■ナイトミュージアムのご案内

壇上伽藍での夜間行事に合わせ、次の3日のみ開館時間を夜8時まで延長します（通常料金）。ぜひお出かけください。

4月29日（月・祝）
伽藍行事：旧正御影供
6月11日（火）
伽藍行事：山王院竪精
7月17日（水）
伽藍行事：御最勝講


旧正御影供の風景

■これからの展覧会

第34回高野山大寶蔵展「高野山の名宝」

［会期］7月13日（土）～9月23日（月・祝）

八大童子立像（国宝・運慶作）のうち六体ほか、多数の至宝を展示予定。

恵光童子像
（八大童子立像のうち）

清浄比丘童子像
（八大童子立像のうち）

秋期企画展「徳川家と高野山（仮）」

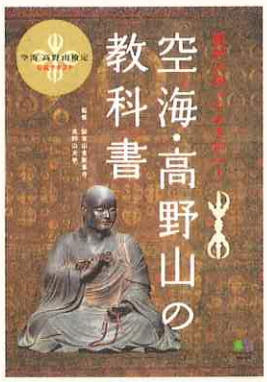
［会期］9月28日（土）～12月15日（日）

徳川家霊台の特別公開（10月12日～20日）にあわせ、徳川家と高野山との関係に焦点をあてた企画展を開催します。

第1回空海・高野山検定が開催されます

［開催日］6月9日（日）
［開催場所］東京／大阪／名古屋／高野山／福岡
［実施級］3級 4,500円（税込）　2級 5,500円（税込）　※3級・2級併願割引 9,000円（税込）
［申込方法］インターネットの公式サイト、または郵便払込取扱票にてお申し込みください。
［申込締切］5月7日（火）
［問合せ先］空海・高野山検定運営事務局　電話：03（3233）4808

検定公式テキスト『空海・高野山の教科書』（槌出版社、税込1,260円）の中で、当館も紹介されています。



よもやま話 Vol.27

明治期における阿弥陀聖衆来迎図の噂話

浄土教仏画の最高傑作として名高い国宝・阿弥陀聖衆来迎図（以下、来迎図とします）は、現在、有志八幡講十八箇院（以下、八幡講とします）の所有となっています。来迎図はもともと比叡山の念仏の聖地、安楽谷の別所にまつられていた霊宝でしたが、信長の比叡山焼き討ちの際に持ち出され、その後、文禄三年（一五九四）になって、豊臣秀吉によって高野山（青厳寺）へともたらされたといいます。

今回はこの貴重な来迎図が、明治期に国外へ持ち出されるとの噂が流れたという話をご紹介いたします。

来迎図には天正十五年（一五八七）の年号をもつ伝来文書（図1）があります。ところがこれが八幡講の所有ではなく、高野山真別所円通律寺（以下、円通寺とします）に伝わっていました。

近年になって高野山桜池院からお預かりした書類の中に、『高野山真別所円通寺の由緒』（図2）という手書きの資料があり、そこには、来迎図は「元来円通寺の名画であった」と記されていたのです。さらに興味深いのは、ある外国人に来迎図を調査させたこと、その後、外国へ売払うとの噂が流れて困ったこと、最終的には八幡講の所有として霊宝館へ預けられたとする内容が、断片的ながら書きとめられていました。

これを書いたのは佐藤仁興（一八九九～一九七二）という方で、同師が浦上隆應和上（一八五六～一九二六）に仕えていたときに聞き取ったものであるとし、昭和四十年（一九六五）になって執筆されていました。

図1　阿弥陀聖衆来迎図伝来文書（中幅分）円通寺
本来は来迎図の背裏に貼られていたものか、またはその写しと思われます。現在は三幅分の文書が巻子本となって、円通寺に伝わっていました。

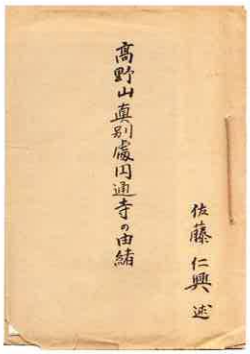


図2『高野山真別所円通寺の由緒』　佐藤仁興著　桜池院
昭和40年執筆

両師の関係については定かではありませんが、浦上和上は円通寺の住持（寺の主長）であった時期があり、佐藤師も同じ円通寺内の事相講伝所主任を務めていたことから、浦上和上の周辺で起こった出来事を直接に聞く機会があったものと思われます。

ただし、来迎図が「元来円通寺の名画であった」とする記述は、浦上和上が語った内容というよりは、文脈からすると佐藤師自身が解釈して記したものと思われます。それは来迎図の所有者が、かつて円通寺であったとする記録はなく、明治十年（一八七七）以降の各種宝物台帳にも、八幡講以外の名義で登録された事実がないことからも分かります。

さて、浦上和上が来迎図について語った内容と関連すると思われる資料に、六角紫水の回想録『六角紫水の古社寺調査日記』（東京藝術大学出版会発行）というものがあります。

六角紫水は明治期を代表する漆芸家で、岡倉天心らとともに古社寺保存会（明治二十九年設置）の一員として、国宝指定を目的に全国の古社寺の宝物を調査した人物です。この回想録には、明治三十年（一八九七）四月に関保之助、大村西崖とともに高野山の宝物調査を行った時のエピソードなどが記されており、その中から来迎図関連の事柄をまとめると次のようになります。

- 来迎図の調査時点では、所有者が一寺の所有ではなく、「檀家」となっていた。
- 檀家の所有物では国宝に指定で

国宝　阿弥陀聖衆来迎図　有志八幡講十八箇院

して仮差抑えにした。

- 来迎図を寺に納めさせた（寺院の所有に復した）。

以上の内容で注目されるのは、来迎図が一時期にしても、個人と思われる檀家の手に移っていたと記録している事実です。また一方で、来迎図が「国外へ売られそうになった」と「寺に納めさせた」という箇所が、浦上和上の語った内容と一致しています。一部ながらもこうした共通点からは、両者の内容がそれぞれ同一の事柄を指しており、時間的にも隔たりがなかったことを意味しています。つまり浦上和上が佐藤師に語った内容は、明治三十年頃の出来事であったことになります。

さらに、六角紫水がいう「檀家」とは具体的に誰を指すのかは定かではありませんが、状況から推測すると、浦上和上であった可能性があります。とすると、来迎図の伝来文書だけが円通寺に伝わっている事実や、浦上和上が語った内容などとを考え合わせると、ごく一時期にせよ来迎図が円通寺において和上の管理下にあったのではなかったか、という思いにいたります。

ところで、宝物の所有権移転や譲渡というものは、明治期における高野山においても珍しくはありませんきないので（当時）、しばらくそのままにしていた。

- 外国へ買われていく所であった。
- 清野長太郎（当時の兵庫県知事）が、（来迎図が）五万円で外国と取引されるのを知って非公式に抑えた。
- 古社寺保存会が「檀家」と交渉

でした。寺領返還による経済的基盤を失い、大火災による寺院の廃絶や統合がくりかえされた余波は想像以上で、多くの文化財が山外に流出、あるいは流出しそうになったとの話があります。

たとえば、金字一切経（重文・荒川経）や金銀字一切経（国宝）、さらには大門の銅板瓦までが借金の担保となり、売りに出される寸前であったことが記録されています。

実は、こうした事態を憂慮した人物の一人に、浦上和上がおられたことが記録から分かっています。霊宝館に収蔵している物件の中に、和上の所有となった釈迦誕生図（図3）をはじめ、数点の宝物があります。これらは円通寺に納められ、最終的には金剛峯寺にすべて奉納されていることから、和上の宝物への関心や、文化財に対する姿勢の一端が見えてきます。

明治三十年前後の高野山の各寺院において、文化財を取り巻く環境が実際にはどのような状態であったのか、詳しくは明らかではありません。そうした中で、来迎図が海を渡りそうになったのが事実だったのか、それとも単なる噂だったのかもよく分かりませんが、当時の寺院の状況を伝える逸話として記録されるべきものだと思います。

その後来迎図は、明治三十九年（一九〇六）になって八幡講の所有として国宝の指定を受けます。つづく明治四十一年（一九〇八）には、東京帝室博物館にて修理が施され、高野山側では来迎図を展示する宝物館（紫雲殿）を計画し、大正十年（一九二一）に霊宝館が開館して現在にいたります。

それにしても、来迎図が比叡山から流転をくりかえしつつ伝えられ、さらに明治という大きな荒波を経て、今私たちの目に触れることができるのは、ある意味、奇跡的なことなのかも知れません。

（M）

図3　釈迦誕生図　金剛峯寺
浦上隆應和上が明治30年（1897）12月8日に感得（入手？）したとする釈迦誕生図です。浦上和上の遺言で、他の作品とともに昭和2年9月14日に円通寺から金剛峯寺へ寄付されました。ちなみに本図には大村西崖による大正8年（1919）付けの鑑定書が付属しています。

霊宝館の庭園

マツ・松・アカマツ・赤松・メマツ・雌松

元高野山高等学校長　亀岡　弘昭

マツ（松）はマツ科・マツ属の樹木の総称、松の木ともいいます。

マツの命名由来については、「神霊が降臨するのを待つ木」、「神霊が宿りあがめ祀（まつ）る木」など諸説があります。松という字については、マツに木公という別称もあり、「つつぬけの木」という意味があるといいます。樹冠に透き間が多くて清々しいことも、その理由の一つではと思われます。

マツ（松）は常緑樹（常磐木）であり、樹齢の長いものもあるので、古くから、不変・忠節・節操・長寿などの象徴とされていたことを、真済僧正が編纂した弘法大師の詩文集・『性霊集』からも、窺い知ることができます。

梅・竹などとともに「めでたい木」、正月行事をはじめ慶事の木でもあり、高野山では、管長様晋山式や法印転衣式などでは必ず「松三宝」が出されます。

マツ属で、高野山の山頂部や、その周辺に自生し、植栽もされている樹種はアカマツとヒメコマツ（別名・ゴヨウマツ・五葉松）です。植栽されているものではクロマツと園芸品種。高野山第一の名木・霊木とされている「三鈷松」はクロマツ系の三葉松の品種だそうです。

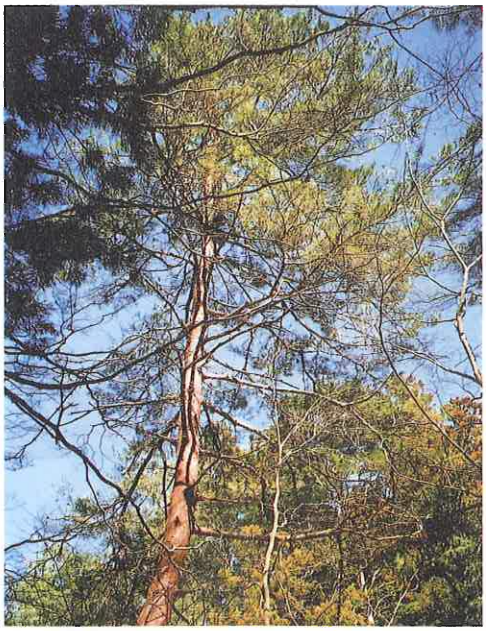
アカマツは樹皮が赤褐色であることによる赤松、クロマツ（黒松・オマツ・雄松・男松）と樹の容態を対比してのメマツという別名があり、雌松・女松の字が当てられています。

女人禁制の高野山に雌松が多く、雄松が少ないことにかかわる「西行の笑い松」という故事伝説が遺っています。クロマツ（雄松）は海岸・沿海など、海に近い地域を主な自生地とする樹種です。

アカマツの学名・Pinus densiflora には「密生した花をもつ山に生える木」という意味があるそうです。花は春に咲きます。

スギやヒノキなどの植林地増大による自然林の減少、都市周辺の開発による森林伐採、生活様式の変化により人の日常生活における森林との結びつきの希薄化、マツクイムシによる大被害などなどによって、全国的に、アカマツは激減しているといいます。

そのような現況ですが、高野山霊宝館の前庭の庭園林には、幹周り一・三～一・九mの八本（実測させてもらったもの）のアカマツが落葉広葉高木と枝々を交え、下木の常緑広葉低木などともなじみ、自然林に入った心地となる一隅があります。


庭園林内のアカマツ

アカマツの幹・樹皮と樹冠

小花が密生した花穂と枝葉